

理科・環境教育助成 成果報告書

第2回 期間：2004年11月～2005年10月

氏名：松尾 正直 所属：直方市立新入小学校

課題名：「地域の人・もの・ことを活用した環境教育」

1. 課題の主旨

本校区は、犬鳴川が流れ、里山として地域の人々から親しまれてきた六ッ岳がある。また、この地で農業を営む人も多く、農業の活性化を目指してグァーグァー市場やアイガモ農法による米作りがされている。

一方、子どもたちの生活を見ると、このような自然と遊ぶ姿はなく、川は、危険なところであり、野菜などを収穫したり、川や山で遊んだりした経験を持つ子は少ない。

そこで、子どもたちに野菜等を収穫したり、川や山で遊ぶ経験をさせたりすることで自然と遊ぶ楽しさを味わえ、この楽しさが環境の大切さや維持・保全していく態度を培うのではないかと考え、本テーマを設定した。

2. 活動状況

(1) 5月「アイガモと出会う」

本校では、アイガモ農法による米作りをしている。アイガモとの初対面は、砂糖水を飲ませるところから始まる。子どもたちは、「かわいい。」と叫びながら、アイガモの雛を抱きかかえ、楽しそうに水やりをしていた。

2週間が経つといよいよアイガモが田に放される。子どもたちは、昼休みに、アイガモのえさをやりに行った。「こーい、こーい。」と言いながらえさをやるが、子どもたちは、自分の後ろをアイガモが歩くようになれという願いの中でえさをやった。この活動は、10月まで続いた。(写真資料添付)

(2) 6、7月「犬鳴川でいかだにのるぞ」

六ッ岳に生えている竹を利用して、いかだを作り、犬鳴川を下ろうという計画を立てた。まず、近所を回りペットボトルを集めた。そして、地域の人々の協力を得て、いかだを組み立てた。「男結び」という結び方をじっと観察し、自分たちでもやってみようとする子がいた。

いよいよ本番、子どもたちは、宮田の役場前から新入夢広場まで3時間ぐらいの時間をかけて下った。「きつかったあ。」と言いながらも途中で川に飛び込む子もおり、楽しそうだった。この活動の途中、いかだをこぎながら、川に浮かぶごみを集めたグループもあった。(ビデオテープ1)

(3) 10月「豆腐作りをしよう」

4月に畑に植えておいた大豆の収穫期を迎え、これを利用して豆腐作りをすることにした。豆腐作りは、地域の人を呼び、作り方を教えて頂いた。初めて作ったとうふの味をして、子どもたちは、「普段食べるより、甘い。」と言い、喜んで食べていた。食べ終わった感想で、「普段食べると

うふは、簡単に食べ終わってしまうけど、実際に作ると案外仕事量が多く、大変だ。でも、自分たちで育てた大豆で作った豆腐の味は、格別だった。」と述べていた。

(4) 11月「そば打ちをするよ」

夏休みに、地域の人から誘いを受けて植えたそばが実った。そばの花は、小さく白くとても可憐だ。そばの実の収穫は、穂を摘みながら行う。収穫したそばは、天日に干し、ふるいにかけて、石臼でそば粉にした。

そのそば粉で、そば打ちをし食べた。そば粉からそばを打ち、できた麺をゆがいて食べるのは初めての経験で、麺の太さもいろいろあったが、自分たちが苦労して育て、そば粉を作った経験は、子どもたちにとって思い出に残るものだった。

(5) 1月「アイガモ井を作ろう」

5月から育ててきたアイガモ、畑で育てたにんじん、ねぎ、夏休みに手伝いに行き手に入れた卵を使ってアイガモ井を作ることにした。まず、自分たちが育てたアイガモをさばくかどうかで、議論をした。さばくのに賛成するグループは、「にわとりや牛、ぶたの肉だって食べているじゃないか。アイガモも食べてもいいんじゃないか？」それに対し、反対派は、「今まで一生懸命に育ててきたのにかわいそうだ。」という意見で対応した。この議論は、なかなか終わらず、授業で、「いのちの重さ」「ペットショップで」「いのちのつながり」を学習した。

この授業では、いのちの重さは、変わらないが自分たちのいのちを維持して行くためには、他の命を奪わないといけない。その行為によって私たちのいのちは祖父母、両親、自分そして、自分の子につながっていくのである。だからこそ、自分たちのいのちも他のいのちも大切なのだということを学習した。

結局、数時間の討論会の中でアイガモをさばいて、アイガモ井を作ることとした。アイガモの解体には、地域の人に来てもらい、「食べるということ」を話してもらって解体した。

子どもたちは、アイガモ井を喜んで食べ、「いろいろないのちを味わって食べよう。」「いただきますの意味が本当に分かった。」と書いていた。

(6) 六ッ岳で

卒業した子どもたちといっしょに2ヶ月に1回の割合で六ッ岳に入り、遊んだ。遊びの内容は、「秘密基地作り」「遊び場作り」である。竹を組み合わせて隠れ家を造ったり、枝にロープを渡して、ブランコやターザンロープを作ったりして遊んだ。子どもたちは、とても喜び、きちんと順番を間もおりながら、楽しそうに遊んでいた。遊ぶ途中で食べるぶた汁やカレーの味は格別だった。その中で、小さい子（参加中、最年少は、2年生）を優先する態度も見せ、また、のこぎりや小刀の使い方を習い、使えるようになっていった。

また、バードウォッチングや田の虫探しも行った。六ッ岳には、110種類の鳥がいるが、その中で24種類の鳥を見分け、とても楽しそうだった。帰ってから、バードウォッチングブックを作成した。

田の虫についても、ジャンボタニシ、カブトエビやオタマジャクシ、八星蜘蛛などを見つけ、田の中を「稲を倒さんでね。」と農家の人の心配も横目に活動していた。

3. 結果

この一年間、地域の人・ものを使って、子どもたちに自然の中で遊ぶ楽しさを味わわせながら、自然に興味・関心を持つようにしむけてきた。子どもたちは、いろいろな活動を通して、自然の厳しさや自分たちの生活にある水、ごみなどに目を向けるようになった。

地域の人々の協力を得ながら、一つ一つの取り組みを行っていったが、子どもたちにとって、これらの人は、「師匠」なのだ。今でも道ばたで会うと「師匠！」と大きな声で挨拶している。

他の植物や動物を育てたり、飼ったりすることで、普段当たり前のように思っている「生命の大切さ」や「自分と他の生命のつながり」についても考えることができた。

最後に子どもたちは、家の近くの水質検査や校区のごみ調べを行い、学習発表会で活動したこととともに、地域の人や保護者、5年生に発表した。

4. 今後の課題と発展

地域の人々の協力を得て、活動を行った。アイガモの飼育では、教室等で育てれば、もう少し、討論会も活発になったのではないかと考える。環境に対しては、子どもたちは、その問題点を意識し、学校で活動できることは行っている。

これから、六ッ岳に入り、秘密基地づくりの発展となるような活動、例えば、竹炭作りなど、を行いたいと思う。また、いろいろな年齢層の子どもたちをまとめて、地域の人々と共に活動できるような団体を作ることができたらと思っている。

5. 発表論文、投稿記事及び当財団へのご意見など